

<b>Title</b>	巻頭言 「新型インフルエンザ・パンデミック」を振り返って
<b>Author(s)</b>	中村, 馨男
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.19-5 : 1
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2364">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2364</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

# 「新型インフルエンザ・パンデミック」をふり返って

2009年最大のニュースは、新型インフルエンザ（豚由来H1N1）パンデミックであろう。1997年香港に発生した強病原性インフルエンザH5N1は、時とともに、鳥→ヒトから、ヒト→ヒトへと直接感染するように変異し、アウトブレイクを起こす危険が警告されていた。H5N1の流行は、目下のところ制御されているが、その間隙を突いて豚由来H1N1が発生した。

国・自治体・企業等は、H5N1を想定した対策やマニュアルを作成しており、それに沿った対策がとられたために混乱も生じた。後からみれば、5月から6月の対策は過剰だったとの批判もあるが、流行のピークを遅らせ、パニックを防止できたとの評価もされている。

新型インフルエンザの流行の中で、予防に関するいくつかの常識も議論をよんだ。1. 手洗い：呼吸器系感染症でありながら、手指→経口あるいは粘膜の感染経路が重視され、予防に手洗いの有効性が強調された。2. マスク：マスクをするのは「日本人だけ」など揶揄された。しかし、①咳などの直接飛沫は防げる、②手で鼻・口の周囲の粘膜に触れることを防ぐ効果があるなどから、マスクの効用も見直されている。③感染者がウイルスを他者に伝播することを防ぐ効果に異論はない。3. うがい：口腔衛生がインフルエンザ予防に有効なことは知られていたが、「うがい」の効果は疑問視された。最近、「うがい」の効果を実証する報告も紹介されている。

一方、視点を変え、自らの感染を防ぐだけでなく、「周囲の人に感染を拡げない」との「予防」は徹底されなかった。無症状の不顕性感染者が20%程度存在したとの推定もある。無症状の者も、自分が感染したとして「周囲に感染を広げない」予防策を徹底する必要がある。「咳エチケット」である。通勤電車の中で、マスク着用者は増えても、気なしにくしゃみを連発している姿も見うけらる。

新型インフルエンザH1N1はパンデミックとなったが、強病原性鳥インフルエンザH5N1の危険が消失したわけではない。H1N1の流行を経験したために、「新型」出現を過小評価する気運となる危険もある。

直面しているH5N1は、毒性が保持されれば、呼吸器系に止まらず全身性疾患であり致死率 60%、最悪のシナリオも懸念される。過去のインフルエンザの概念とは異なり、1600年代流行の「ペスト」を彷彿させる（デフォー「疫病流行記」）。

人類は遺伝子解析の方法やワクチン、抗ウイルス薬の発明をなし、富裕国では、人々は十分な栄養も摂取されている。一方、ヒトや動物の国際的往来の増大、過密・巨大都市の出現、家禽・家畜の大規模飼育、南北の経済格差および感染症に対する公衆衛生的基盤の脆弱化などの現実を背景に抱えている。

このような世界的背景のもとで、強い毒性と感染力をもったH5N1のような新型インフルエンザが出現した場合の被害は計り知れない。危機管理の備えが一層、望まれる。